pp. 1–18

展望論文

複線径路等至性アプローチの時間概念における方法論的考察

イマジネーション理論を援用して時間的文脈を TEM 図でどう描くのか

発行：2025 年 3 月 31 日

上川 多恵子（立命館大学 OIC 総合研究機構）
宮下 太陽（株式会社日本総合研究所 未来社会価値研究所／京都橘大学）
サトウ タツヤ（立命館大学総合心理学部）

抄　録

本研究は複線径路等至性アプローチ（TEA）における時間概念を整理し，イマジネーション理論を援用した TEM 図による人生径路の描写方法とその課題を考察することを目的とする。複線径路等至性モデリング（TEM）が基礎とする時間概念である「非可逆的時間」はベルクソンの純粋持続に由来し，時間が持続的に流れ込む状態として人々の経験を捉える。また，発生の三層モデル（TLMG）で分析されるヴァルシナーの「促進的記号」は，行動を駆り立て何か新しいことへと導く働きを持つ記号である。TEA で示されるこのような時間に関わる概念に加えて，本研究ではズゥイットンのイマジネーション理論，特に時間的志向性の概念を援用することで，分岐点（BFP）における選択場面において，経験の想起と未来への予期が交錯する様態を可視化し，TEM 図の豊穣描写図像化を試みた。今後の方法論的課題として，イマジネーションの時間的志向性と非可逆的時間との理論的整合性の精緻化，TEM 図の描写に関わる表現の複雑性とのバランス，および個人の経験と社会的文脈の相互作用における表現方法の深化が挙げられる。これらの課題に取り組むことで，TEA による人生径路の質的理解の理論的・方法論的発展に寄与することが期待される。

キーワード：複線径路等至性アプローチ，TEM 図，非可逆的時間，促進的記号，イマジネーション理論

連絡先：上川 多恵子（E-mail: tk0715sh@gmail.com）

pp. 1–18

Review

Methodological Considerations on the Concept of Time in the Trajectory Equifinality Approach

How to Depict Temporal Context in TEM Diagrams Using Imagination Theory

Published: March 31, 2025

Taeko Kamikawa (Open Innovation & Collaboration Research Organization, Ritsumeikan University)
Taiyo Miyashita (The Japan Research Institute, Limited. The Institute for Societal Values in Future Generations/Kyoto Tachibana University)
Tatsuya Sato (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

Abstract

This study aimed to examine the concept of time in the Trajectory Equifinality Approach (TEA) and explore the methods and challenges in depicting life trajectories by applying Imagination Theory to TEM diagrams. The concept of "irreversible time," which forms the foundation of Trajectory Equifinality Modeling (TEM), is derived from Bergson's pure duration and captures people's experiences as states in which time continuously flows. Additionally, Valsiner's "promoter sign," analyzed in the Three-Layer Model of Genesis (TLMG), functions as a sign that motivates action and facilitates novel developments. In addition to the time concepts presented in the TEA, this study attempted to visualize the intersection of recalled experiences and future anticipations at bifurcation points (BFP) by applying Zittoun's Imagination Theory, particularly its concept of temporal orientation, thereby enriching TEM diagrams with pleromatic visual representations. The methodological challenges for future research include refining the theoretical coherence between temporal orientation in imagination and irreversible time, balancing the complexity and clarity of TEM diagram expressions, and developing methods to represent the interrelationship between individual experiences and sociocultural contexts. By addressing these challenges, this study contributes to the theoretical and methodological development of a qualitative understanding of life trajectories using TEA.

keywords: Trajectory Equifinality Approach, TEM diagrams, irreversible time, promoter sign, Imagination Theory

Correspondence concerning this article should be sent to:
Taeko Kamikawa (E-mail: tk0715sh@gmail.com)

I　はじめに

複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）は，人間の発達や変容のプロセスを時間的文脈の中で理解しようとする質的研究法である。サトウ（2015a，p. 4）が「時間を捨象せずに人生の理解を可能にしようとする文化心理学の新しいアプローチ」として提唱した TEA は，記号論的文化心理学を理論的基盤としている。TEA を構成する三つの方法論である「歴史的構造化ご招待（Historically Structured Inviting: HSI）」，「複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling: TEM）」，「発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis: TLMG）」は，「生を享けた個人がその環境の中で生命を維持し生活し人生をまっとうするために記号を取り入れつつ生きていくプロセス」（サトウ 2015b，p. 4）を描写することを可能にする。

TEA の理論的枠組みにおいて，時間概念は中核的な位置を占めている。特に，TEM における非可逆的時間の概念は，人生径路の分析において重要な役割を果たしている。しかしながら，この時間概念を具体的な TEM 図に反映させる方法については，いくつかの理論的・方法論的課題が指摘されている。ここでは以下の三点に焦点を当てる。

一つ目に，「現在の個人の意味づけ」の可視化に関する課題がある。やまだ（2010）は，ナラティヴ研究の視点から，選択の岐路の時間的位置づけについて重要な指摘を行っている。「選択の岐路は本当にそのときの今，現在にあるのだろうか。それが『岐路』であったかどうかは，実は選択したあとに振り返ってみた人生軌跡としてしか記述できないのではないだろうか」（やまだ 2010，p. 51）という問いは，TEM 研究における本質的な課題を提起している。

二つ目に，TEM による分析の「豊穣描写図像」化という課題がある。サトウ（2013）が指摘する TEM 図の「豊穣描写図像（pleromata）」化という課題は「現在の個人の意味づけ」の可視化，つまり，個人の経験における時間的な意味づけをいかに豊かに描出するかという問題と深く関連している。サトウ（2013）は，TEM 図に関して以下のような二つの課題を論じている。第一に，TEM 図が機械的に見えるという点，第二に，複雑になりすぎてわかりにくいという点である。特に前者について，サトウ（2013）は TEM 的な質的研究を絵画における「枠組抽出図式（schemata）」（骨格や輪郭を描いていくやり方）に喩え，場合によっては「サバサバしすぎの線画」に見える可能性を指摘し，そのうえで，個々人の人生を描く際には「豊穣描写図像（pleromata）」（毛並みなどを細かく描いていくやり方）のように個人の人生を描く詳細な描写の必要性を主張している。Valsiner（2007=2013）は枠組抽出図式と豊穣描写図像について，アイコン（対象の重要とされる性質を持つ記号）は対象の即時的な知覚がそのオリジナルよりもディテイルの「豊かさが失われる」（枠組抽出図式）か，「より豊かになる」（豊穣描写図像）かのどちらかであると指摘しているが，豊穣描写図像化は社会化された非言語的レベル（情緒レベル）で作用すると論じている。

三つ目に，近年の TEA 研究において援用されているズゥイットンのイマジネーション理論と，TEA の時間概念との理論的統合の課題に着目したい。イマジネーション理論の援用（市川 2020；宮下他 2022；上川他 2023, 2024）は，「過去の経験をもとに新たな考えやイメージをつくるプロセス」（木戸 2023，p. 63）を分析する新たな視座を提供している。特に，分岐点でのイマジネーションの働きが次の時点への移行を導く役割を果たすという指摘は重要である。しかし，このイマジネーション理論と TEA の時間概念との理論的統合，およびその描写方法に関する体系的な議論は十分になされていない。

以上のことから，本論文では TEA における時間概念を再検討するとともに，イマジネーション理論の援用による新たな描写方法の可能性を探究することで，人生径路のより豊かな描き方について検討する。

II　研究目的

本研究の目的は，TEA における時間概念を再検討したうえで，イマジネーション理論を援用した TEM 図による人生径路の描き方を検討し，TEM 図で事象を描く際の時間概念に関わる留意点と課題を考察することである。

ここでは以下の 2 つの中心的な問いを設定する。1）TEM は人々の経験を非可逆的時間の中でどのように記述しようとしているのか。2）イマジネーション理論を援用することで，時間的文脈をどのように豊穣描写図像的に TEM 図を描くことができるのか。

このような目的に取り組むにあたり，TEA の中核的概念である「人間が時間とともにある」という考え方，および TEM の基盤となる「非可逆的時間」の概念について検討する必要がある。本論文では主に，TEA の時間概念に関わる主要な理論的背景として考えられるベルクソンの「純粋持続」，ヴァルシナーの「促進的記号」に加え，TEA を用いた質的研究と組み合わせて用いられるようになっているズゥイットンの「イマジネーション」の時間的志向性について整理する。その上で，イマジネーション理論を用いた TEM 図の描き方の検討を行い，その描写方法の可能性について考察する。

III　TEA における時間概念 ―人間が時間とともにあるということ

ここでは，TEA の理論的背景に関わるベルクソンの持続，ヴァルシナーの促進的記号，およびズゥイットンのイマジネーション理論における時間的志向性を参照し，TEA における時間概念について整理する。

1　非可逆的時間と純粋持続 ―ベルクソンを中心に

複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling：TEM）の時間概念の根幹をなす「非可逆的時間」は，ベルクソンの「純粋持続」の概念に由来する。純粋持続とは人々の意識の中で絶えず流れている時間であり，「持続」に空間的なものをまったく介入させない時間概念である（Bergson 1889=2001）。そして，過去と現在が相互に浸透し合った時間である（香川 2009）。平井（2022）は，この純粋持続の本質を理解するために，流れる時間，純粋な継起，計測不能性という三つの重要な特徴を指摘している。

純粋持続の基本的な特徴は，「流れる時間」としての性質である。これは，意識の中で絶え間なく進行する主観的経験を指し，客観的に測定可能な物理的時間とは異なる，個人の内的体験に基づく時間感覚を表現している。この流れる時間の性質は，「純粋な継起」という特徴と密接に関連している。Bergson（1889=2001）は，純粋持続を「自我が生きることに身をまかせ，現在の状態と先行の状態とのあいだに分離を設けることを差し控えるとき，私たちの意識状態の継起がとる形態である（p. 122）」と説明している。平井（2022）は，これを現在進行形の時間経験として解釈し，純粋持続が過去と現在の区別が曖

昧な，連続的な経験の流れであることを強調している。

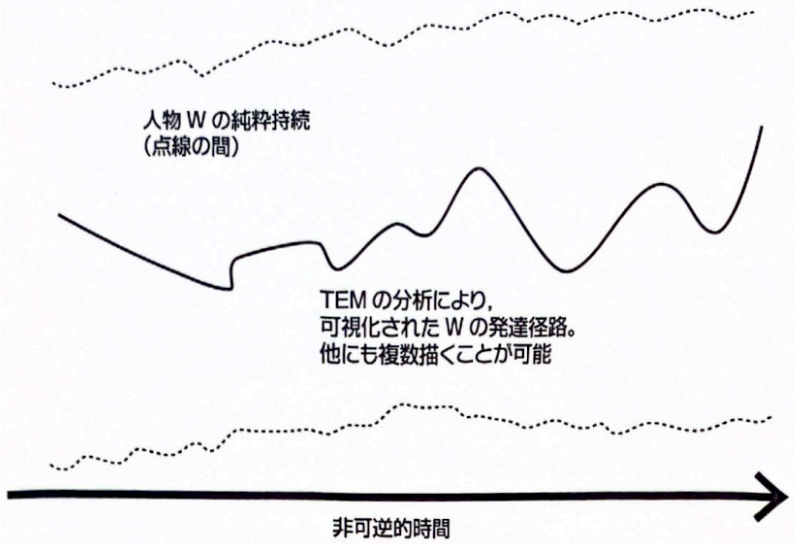
さらに，純粋持続の「計測不能性」は，その質的性質を浮き彫りにする。ベルクソンは時間の二面性，すなわち「流れるが計測できない側面」と「計測できるが流れない側面」を区別している（平井 2022）。前者が純粋持続に相当し，後者は空間化された時間概念に対応する。この区別は，純粋持続の本質的な特徴を理解する上で重要である。

純粋持続の概念は，過去と現在の相互浸透的な関係性を示唆している。香川（2009）が指摘するように，「現在という時間は独立にあるのではなく，過去が流れ込み続けている現在である点で相互浸透的なもの（p. 167）」である。この視点は，TEM における非可逆的時間の理解に重要な示唆を与えている。

また，ベルクソンの純粋持続を具体的にイメージする際，聴覚的な比喩が用いられることが多い。例えば，純粋持続はメロディのように，各音が有機的に一体化し，区切りのない連続体として知覚される（Bergson 1889=2001；中村 2014）。一方で，檜垣・藤田（2022）は，純粋持続をリズムとして捉える見方を提示している。檜垣・藤田（2022）によれば，リズムとは「反復のうちに立ち現れてくる質的なもの，繰り返しによって生み出される時間パターンのまとまり（p. 59）」であり，純粋持続の本質は「同じことの繰り返しが同じことにはならず，少しずつ不可逆的な質的変化を生み出していく（p. 60）」点にある。質的変化を生み出していく点については，「純粋持続の考え方からすると，明確に当人に気付かれていなくとも，何らかの，個々人に特有の時間が意識に持続的に流れ込み，人びとに特有の変化が，常に起こっていることになる。つまり，簡単には見えなくとも，次の瞬間には，人は質的に変わってしまっている（香川 2009，p. 168）」と指摘されており，このような点で時間は「非可逆」なのであると論じられている。

このような概念的理解は，TEM における時間の描写方法に重要な示唆を与える。特に，香川（2009）が提示する「純粋持続と可視化された一つの軌跡」（図 1）は，ベルクソンの時間概念を TEM の文脈で視覚化する試みとして，理論的理解を深化させる上で極めて重要である。香川（2009）は図 1 について，「点線と点線の間の隙間のない領域が，その当人の純粋持続である（p. 170）」と説明し，さらに純粋持続を「本来，点線

図 1　純粋持続と可視化された一つの軌跡（香川 2009，p. 170）



ですら表すことのできない境界の曖昧なもの（p. 170）」と指摘している。しかし，TEM 図で非可逆的時間を表す「→（矢印）」を描くのは，「時間を直線的なものとして捉えているのではなく，あくまで非可逆性を意味するための方向を描いている（サトウ 2009a，p. 6）」からであり，常に時間を捨象しないということに自覚的になるために，TEM 図に非可逆的時間を表す矢印を描くことを大切にしている。

すなわち，TEM で表される非可逆的時間の概念を基盤とした TEM 図は，当事者の実際の軌跡を描写しつつ，その背景に当事者の意識に必ずしも顕在化していない個々人の時間が持続的に流れ込んでいることを念頭に TEM 図を描くことになる。この時間の流れは，過去と現在の区別が曖昧な連続的な経験として記述される。

以上のことから，TEM における非可逆的時間の概念は，ベルクソンの純粋持続を基盤としつつ，人間の主観的時間経験を捉える重要な理論的枠組みを提供していることがわかる。このように非可逆的時間は，個人の経験を連続的かつ質的に変化するプロセスとして捉え，TEM の方法論的特徴を形成する中核的要素となっている。

2　促進的記号―ヴァルシナーを中心に

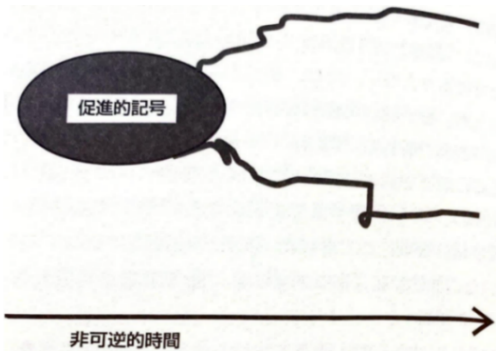
「促進的記号」は行動を駆り立てる記号であり，何か新しいことへと導く記号の働きを重視した記号概念である（サトウ 2019）。促進的記号は発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis: TLMG）において重要な役割を果たすとされており，個人の自己変容や行動変容のプロセスを「行為–記号–価値」の三層間の動的な相互作用として捉える理論的枠組み（サトウ 2022）の中で示されることが多い。しかし，必ずしも TLMG でのみ促進的記号が示されるというわけではなく，TEM においても促進的記号の重要性を示すことができると考えられる。なぜなら，記号は非可逆的時間に生きることの必然性によって未来志向となる（Valsiner 2014=2024，p. 110）からである。Valsiner（2014=2024）によると，人びとは「所与の瞬間に『振り返る（looking back）』ことを必要とするように見えるが，実際には『前を向く（looking forward）』ことであり，これは，過去からのさまざまな痕跡に接近できるためである。非可逆的な時間の中で，人は『来るかもしれないもの』との関係を示すことなく『それが何だったか』に言及することができない（p. 110）」と論じられている。このような人が前を向く特性は，促進的記号が未来への方向づけを強調する記号であるとされていることと深く関連するだろう。

促進的記号は未来への方向づけを強調している点が重要なポイントとされており，これは，現在において記号のその影響が必ず未来に向かって開かれているという特性を示している。促進的記号の具体例として，サトウ（2013）は「福島県吾妻山の雪ウサギ」の写真を挙げており（図 2），これは自然現象がある特定の文化を持つ人々にとって，その行動を駆り立てる記号として機能する可能性を示唆している。つまり，図 2 の雪ウサギは多くの人にとっては面白い形をした雪に過ぎないが，近隣の農民にとっては「残雪がウサギの形になると，稲作を始める」という稲作を促進する記号として機能する（サトウ 2013）。

図 2　促進的記号の例：福島県吾妻山の雪ウサギ（サトウ 2013）

さらに，サトウ（2009b）は促進的記号の概念的理解を深めるため，ヴァルシナーが論じる「二つの曲線の間の領域が促進的記号によってガイドされる領域を示している（p. 98）」図を提示しており（図 3），促進的記号が人々の行動を駆り立てるための選択の幅を持つことを示している。このような促進的記号の特性は，個人の未来に向けた行動の選択が無秩序に広がっているのではなく，その人生径路における一定の範囲内で多様な可能性を持つことを示唆している。

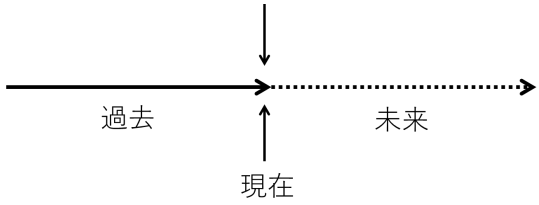
図 3　促進的記号（サトウ 2009，p. 98）



また，ヴァルシナー（2009）は，「TEM 自体は，記号現象を含まないモデルである。しかし，心理的な流動性を組織するときに，意味構築の行為及びその機能―促進的記号―がどこに生起しがちであるのか，その背景を図示するのである（p. 182）」と指摘している。この文脈において，サトウ（2023）が提示する「過去と未来を橋渡しする現在」の図（図 4）は，現在という時点が過去からの影響を受けつつ，同時に未来への可能性を開くという時間的構造を視覚化しており，促進的記号が未来に属する記号であるという概念的理解を深めるのに役立つ。

このような促進的記号の概念は，個人の経験と行動を時間的文脈の中で理解するための重要な概念となっており，「記号の影響で何らかの行為を行うとすれば，それは過去でもなく現在でもなく，未来に属することになる（サトウ 2023，p. 36）」という人間の心理的プロセスにおける時間性と記号の役割をより深く理解することを可能する。

図 4　過去と未来を橋渡しする現在（サトウ 2023，p. 36）



3　イマジネーション―ズゥイットンのイマジネーション理論を中心に

TEM はベルクソンの純粋持続を基とした非可逆的時間の流れの中で人が人生をどのように生きているのかを分析する質的研究法であり，促進的記号という未来に属する記号が重視される。しかし，やまだ（2010）が指摘するように，TEM は現在の岐路における選択の重要性を指摘するには適しているかもしれないが，選択の岐路は本当にその時の今にあったのか，それが岐路であったかどうかは選択した後に振り返った人生の軌跡としてしか記述できないのではないだろうかという疑問が論じられている。やまだ（2010）は，時間はナラティヴによって構成され，過去も現在も未来も再構成や再生成されると考え，「現在から過去へ時間が逆行してもどるリフレクティブな働き，振り返る視線や語りによって，はじめて人生軌跡が明確になる。また，未来を先取りして現在を見ることによって現在の行為の意味が明らかになる（p. 52）」と論じ，時間のターン（転回），リターン（戻る，帰る）させるといった働きは人生や出来事をナラティヴで捉える時には避けて通れない重要なものであると指摘する。そのため，TEM が主に強調する非可逆的時間の中における経験の連続性と非可逆

性が，このような時間のターンやリターンを許さないものなのではないかと考えられてしまうことがあるのではないだろうか。そこで，以下では，ズゥイットンのイマジネーション理論における時間的志向性を TEM 分析に援用する可能性を検討したい。

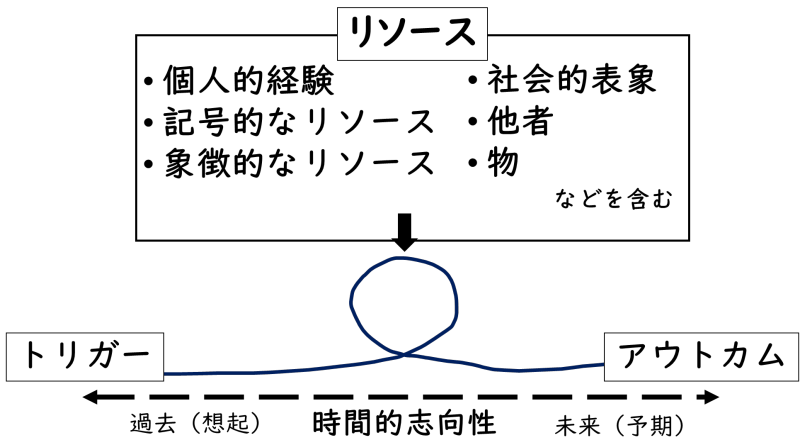
(1) イマジネーションの時間的志向性

ズゥイットンのイマジネーション理論は，時間概念に対する異なる視点を提供しつつ，その理解を補完する可能性を有している。イマジネーションとは「過去の経験をもとに新たな考え方やイメージをつくるプロセスを意味し，現実と近接する世界の想像（木戸 2023，p. 63)」を扱うものであり，イマジネーションは日本語に訳せば「想像」という表現となるが，イマジネーションを示す「想像」という言葉には「構想」の意味が含まれる（木戸 2023)。

非可逆的時間の概念が過去から現在，そして未来へと一方向的に流れる時間の性質を強調するのに対し，イマジネーションは，人々を実際の行動から切り離し，時間と因果関係の非可逆性の制約から解放する（Zittoun & Valsiner 2016）機能を持つ。つまり，時間の流れの認識において，非可逆的時間が過去から現在，未来へと一方向的な流れを前提とするのに対し，イマジネーションは過去，現在，未来を自由に行き来することができる。イマジネーションは図 5 のように，トリガー，リソース，アウトカムという 3 つで構成された連続的なループのことを指す。図 5 で示される「イマジネーションループ」の「トリガー」とは，経験の近位圏からの切り離しを引き起こすものであり，「イマジネーションする」ということは，「今–ここ」にある近位の経験から人を切り離すことである。また，イマジネーションループでの時間は「時間的志向性」と呼ばれ，これは「時間的方向性」を示す。つまり，「想起」（remembering）は「過去のことを考える」ということを指し，「予期」（anticipating）は，「これからのこと（実現可能性が高いものも低いものも含む）を考える」ということを指す。このように，イマジネーションループでは，時間的に未来のことにもあてはまり，過去のことにもあてはまる（Zittoun 2020)。未来の予期においては，非可逆的時間が現在の延長線上に未来を位置づけるのに対し，イマジネーションは現在の制約から離れた未来の可能性を探索することを可能にする。例えていえば，試験勉強中に次の休みに旅行する場所について考えるなど，現在の置

図 5　イマジネーションループ

（Zittoun & Gillespie（2015)，Zittoun（2020)，宮下他（2022)，上川・宮下・安田・サトウ（2024）をもとに作成）



かれている状況から離れた未来の可能性を考えるといったことである。

次に，「リソース」とは，「個人的経験・記号的なリソース・象徴的なリソース・社会的表象・他者・物など」を指し，個人の経験だけでなく社会的に共有されたイメージもリソースとなる。個人が持っているリソースは多ければ多いほど想像を広げていくことができる。最後に，「アウトカム」とは，新しい何かが得られるという結果であり，この新しい何かとは，想像してみて楽しかったというような感情や新しいアイディアが浮かんでくるといったこと，どのような計画を立てようかといった計画などが含まれる（上川他 2024）。

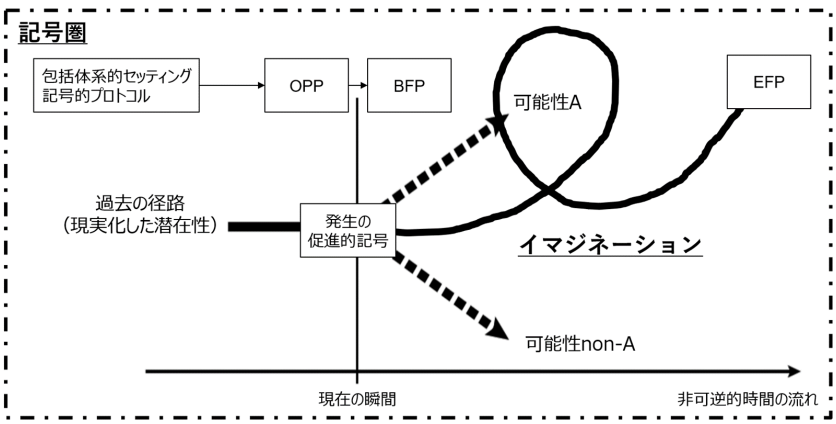
また，木戸（2023）は，イマジネーションはTEA における分岐点（Bifurcation Point: BFP）のようにアイデンティティが揺らいだり，ラプチャー（突発的出来事）に遭遇してそれまでの経験と未来の経験がつながらなくなったりするといったことが生じたときに，これまでの経験や社会的なリソースの使用を促し，新たな可能性を示す役割を持つと指摘している。BFP とは，「文化的・社会的な制約と可能性の下で実現される意思や葛藤・迷いを含む個別多様な歩みを複数に分かつポイントのこと（上川 2023，p. 7）」であるが，BFP においてイマジネーションが果たす役割を考慮することで，個人の選択プロセスをより多角的に理解できるようになる。具体的にいえば，個人が BFP に立ったとき，その時点で思考する過去や未来の出来事を時間の制約なしに想像していることを明示的に記述することが可能になる。

（2）TEM のイマジネーションモデル ―イマジネーション理論の援用例として

上述したイマジネーションの理論を援用し，宮下他（2022）は各人が持つ文化的背景や思考を明示的に分析するために記号圏における「TEM のイマジネーションモデル」（図 6）を提案している。TEM のイマジネーションモデルとは，Valsiner（2018）が提示した TEM の基本単位をもとに，「トリガー」「リソース」「アウトカム」を伴う時間的な連続のループのことを指すイマジネーションループモデル（Zittoun & Gillespie 2015）を発展的に統合する形で，記号論的文化心理学に立脚したモデルである。

このような TEM のイマジネーションモデルは，TEM 分析を行う際に研究協力者の生活している環境を研究者がより深く認識し把握することを支援する手段の一つであると考えられている（上川他 2024）。上述したように，イマジネーションは TEA における分岐点（BFP）のようにアイデンティティが揺らいだり，ラプチャーに

図 6　記号圏における「TEM のイマジネーションモデル」（宮下他 2022）



遭遇してそれまでの経験と未来の経験がつながらなくなったりするといったことが生じたときに，これまでの経験や社会的なリソースの使用を促し，新たな可能性を示す役割を持つ（木戸 2023）とされており，TEM における分岐点の分析をより豊かにする可能性を持っている。

TEM のイマジネーションモデルでは，「発生の促進的記号」が働いたと考えられる分岐点（BFP）での人と記号との相互作用について具体的な有り様を記述するために，イマジネーションループを用いて分析する。ここで重要となるのは，促進的記号と発生の促進的記号の概念的区別がされている点である。「発生の促進的記号」は TEM のイマジネーションモデルを提案した宮下他（2022）によって提唱された。本論文で上述したヴァルシナーの「促進的記号」は，「行動を駆り立てる記号（サトウ 2019，p. 36）」であると広く定義されているのに対し，「発生の促進的記号」は，「ある状況下で人が通常通るであろうと考えられる出来事」が何らかの影響で「これまでとは異なる選択を迫られる出来事」となる際に発生し，そこで人に何らかの深い思考を呼び起こし，イマジネーションのトリガーとなる記号であると定義される。つまり，発生の促進的記号は，TEM 図においては等至点（Equifinality Point: EFP）に至る大きな分岐となりえた分岐点（BFP）で発生し，個人がこれまで持っていた価値観を揺るがすような記号（宮下他 2022；上川他 2024）としての特徴を有している。

このように，イマジネーション理論を援用した「TEM のイマジネーションモデル」の特徴は，TEM における分岐点の分析をより豊かにする可能性を含意すると同時に，個人が分岐点（BFP）に立った際の過去や未来の出来事に対する時間的制約のない想像を明示的に記述することを推奨したモデルとなっている。

IV TEM 図で描く「現在」の分析結果 ―TEM におけるイマジネーション理論の援用可能性

本論文では，上述した TEM のイマジネーションモデル（図 6）を参考としながら，エピソード「私たちの赤い車」という架空事例における「赤色のファミリーカーを買う」過程の分析を行う。そして，イマジネーションによる想起と予期と促進的記号を TEM 図に記述した「人生径路の描き方」について検討する。本論文では，なぜイマジネーションによる想起と予期を用いて豊穣描写図像的な TEM 図を描くことを試みるのか。「はじめに」でも述べたように，豊穣描写図像化は社会化された非言語的レベル（情緒レベル）で作用する（valsiner 2007=2013）と指摘されている。例えると「建物」というアイコン（対象の重要とされる性質を持つ記号）は豊穣図像化的な抽象に満ちているものであるとされており，中でも寺院や教会は細やかに描写された建築物であるが，その建築物の全体的な意味は視覚，聴覚，その他の感覚システムの現象からなる（Valsiner 2007=2013）。つまり，そのアイコン（記号）に対して，人びとがどのように感じ，どのような抽象的なイメージをもっているのかということを理解することが豊穣描写図像化した TEM 図を描くことにつながるのではないかと考える。また，第 3 節で述べてきたとおり，ベルクソンの純粋持続を基とした非可逆的時間と未来に開かれたヴァルシナーの促進的記号による経験の連続性と非可逆性が TEM で強調されることで，語りで聞かれた時間のターンやリターンをどのように記述すればよいのかと研究者にとって悩ましく感じることがある。よって，本論文では，以下のような分析手順に基づいて，二つのパターンの TEM 図を描くことを試みた。

パターン 1 は「赤色のファミリーカーを買う」

径路の TEM 図であり，パターン 2 は「当事者のイマジネーションと促進的記号を加えた TEM 図（BFP の前後を中心として）」である。どちらの TEM 図もその分析に当たっては，安田（2015）に基づき，架空事例「エピソード：私たちの赤い車」を繰り返し精読をしながら文章を意味のまとまりごと／（スラッシュ）で区分した。次に，この切片化されたデータを表 1 の「事象」として整理する際には以下のように行った。第一に，出来事の時系列的な流れを基本として配置した。第二に，各切片に含まれる行為や選択の要素を抽出し，独立した事象として位置づけた。

パターン 2 の TEM 図においては，それぞれの事象に対して，過去の経験の想起や未来への期待といった時間的な思考の要素を識別し（エピソード中の下線部），イマジネーションとして記述した（表 3）。例えば，本事例では「赤色のファミリーカーを買う」という事象において，当事者の「過去の経験を思い出す」という想起と，「未来を期待する」という予期を示した。これらの時間的な思考の要素は，表 2 において事象と関連づけられたイマジネーションとして整理した。このように，時系列的な流れを基本として出来事の事象を配置し，それに付随する当事者の時間的な思考プロセスについてイマジネーション理論の時間的志向性（想起と予期）を援用した形で抽出した。そして，次の事象へ移ることを促した記号を促進的記号として捉え，TEM 図の中で記述した。以下では，「エピソード：私たちの赤い車」を用いて，2 つのパターンの TEM 図（図 7 と図 8）を示す。

エピソード：私たちの赤い車

第 3 子の誕生で家族が増え，妻とも相談してより広いファミリーカーへの買い替えを考えることになりました。／私は実用性を重視し，汚れの目立ちにくい青色の車を検討していたのですが，次男が「赤い車がいい！」と目を輝かせて言い出しました。／長男も妻も「明るい色も良いかもね」と賛同してくれました。／私は過去の経験から，明るい色の車は洗車の頻度が増えたり，小さな傷や汚れが気になったりしたことがあって，／落ち着いた青色なら，日々の送り迎えや買い物で付きがちな汚れも目立ちにくく，長く使えると考えていました。／赤い車はなんとなく目立ちますし，／値段も少し高かったんです。／そんな懸念があったものの，／子どもがこれほど車選びに興味を持ってくれたことが嬉しく，／家族での外出が楽しくなりそうだという期待も芽生えてきました。／「長く乗るなら，気に入ったものの方がいいかな」。そう決意して選んだ赤い車は，私たち家族の大正解となりました。／
子どもたちは「僕たちの赤い車だ！」と誇らしげで，／家族での外出も増えていきました。／実用性だけでなく，家族の願いに耳を傾けることで，より深い絆が生まれた，私たち家族の大切な思い出となりました。／

1 「赤色のファミリーカーを買う」径路の TEM 図

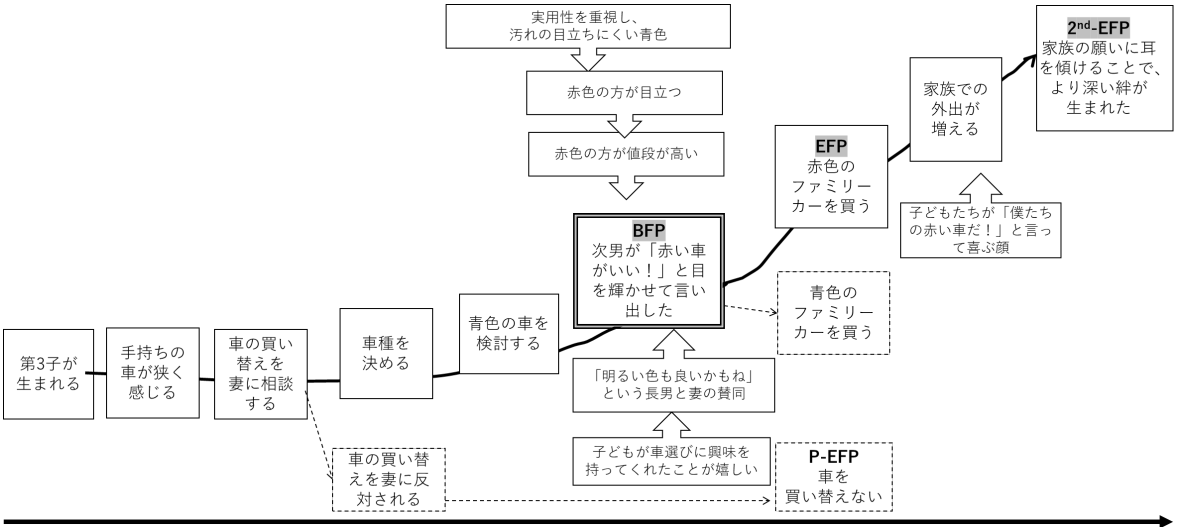
パターン 1 としての TEM 図（図 7）では，切り出したデータを表 1 のように「事象」,「SD（社会的方向づけ）」と「SG（社会的助勢）」に分けて「赤色のファミリーカーを買う」径路の TEM 図を描いた。SD と SG はその時点で起きた出来事を中心に径路に影響を与えた社会的諸力を示した。

分析の結果，この事例における径路は，第 3 子の誕生を起点として展開していることが明らかになった。事象の展開として，まず手持ちの車の狭さを感じ，車の買い替えを妻に相談し，車種を決定するという一連のプロセスが確認された。

表 1　「赤色のファミリーカーを買う」径路における事象・SD・SG

事象	● 第 3 子が生まれる ● 手持ちの車が狭く感じる ● 車の買い替えを妻に相談する ● 車種を決める ● 青色の車を検討する ● 次男が「赤い車がいい！」と目を輝かせて言い出した（BFP） ● 赤色のファミリーカーを買う（EFP） ● 車を買い替えない（P-EFP） ● 家族での外出が増える ● 家族の願いに耳を傾けることで、より深い絆が生まれた（2nd EFP） ● 妻に車の買い替えを反対される（可能な径路） ● 青色のファミリーカーを買う（可能な径路）
SD（Social Direction：社会的方向づけ）	● 実用性を重視し、汚れの目立ちにくい青色 ● 赤色の方が目立つ ● 赤色の方が値段が高い
SG（Social Guidance：社会的助勢）	● 「明るい色も良いかもね」という長男と妻の賛同 ● 子どもが車選びに興味を持ってくれたことが嬉しい ● 子どもたちが「僕たちの赤い車だ！」と言って喜ぶ顔

図 7　パターン 1：「赤色のファミリーカーを買う」径路の TEM 図



この過程で，当初は青色の車を検討していたが，次男が「赤い車がいい！」と目を輝かせて言い出したことが重要な分岐点（BFP）となっている。

この分岐点において，SD として，「実用性を重視し，汚れの目立ちにくい青色」「赤色の方が目立つ」「赤色の方が値段が高い」という三つの抑制的な力が働いていた。一方，SG として，「明るい色も良いかもね」という長男と妻の賛同や，子どもが車選びに興味を持ってくれたことへの喜びが促進的な力として作用していた。

結果として，この事例では「赤色のファミリーカーを買う」（EFP）という選択がなされ，その後，家族での外出が増え，最終的に「家族の願いに耳を傾けることで，より深い絆が生まれた」というセカンド等至点（2nd EFP）に到達している。一方で，「車を買い替えない」という両極化した等至点（P-EFP）や，「妻に車の買い替えを反対される」「青色のファミリーカーを買う」という（実現はされなかったが実現）可能な径路も存在していたことが示された。特筆すべき点として，子どもたちが「僕たちの赤い車だ！」と言って喜ぶ表情が新たな SG として機能し，選択の正当性を事後的に強化する役割を果たしていたことが明らかになった。これは，選択後の家族の反応が，その選択の意味づけに重要な影響を与えることを示唆している。

このように，パターン 1 である図 7 の TEM 図は経験を時系列に並べ，各事象における SD と SG を抽出した図となっている。

2　当事者のイマジネーションと促進的記号を加えた TEM 図

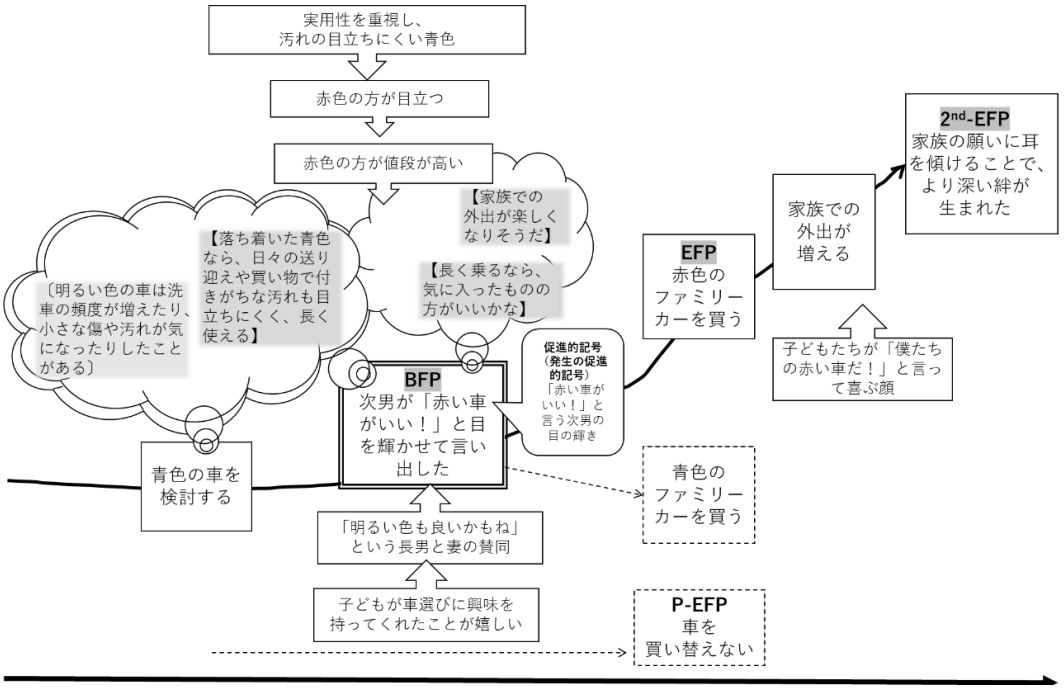
パターン 2 としての TEM 図（図 8）では分岐点（BFP）の前後を中心として，当事者が過去の経験を思い出したり，未来を期待したりする様子に関わる当事者の思考をイマジネーションとして描いた。パターン 2 は TEM のイマジネーションモデル（宮下他 2022）を参考とした。そのため，「赤色のファミリーカーを買う」に至るまでに発生した促進的記号を「個人がこれまで持っていた価値観を揺るがすような記号」である「発生の促進的記号」として TEM 図を描いた。イマジネーションと促進的記号（発生の促進的記号）として切り出したデータは表 2 に示す。

分岐点（BFP）前後における当事者の経験を分析した結果，過去の想起と未来への予期という二つの方向性を持つイマジネーションの働きが確認された。まず，過去の想起として，「明るい色の車は洗車の頻度が増えたり，小さな傷や汚れが気になったりしたことがある」という個人的経験が見出された。これは，当初青色の車を選ぼうとした判断の背景となる経験である。一方，未来への予期としては二つの異なる方向性が確認された。第一に，「家族での外出が楽し

表 2　「赤色のファミリーカーを買う」径路におけるイマジネーション・促進的記号

イマジネーション	〔過去を想起する〕 ● 明るい色の車は洗車の頻度が増えたり、小さな傷や汚れが気になったりしたことがある 【未来を予期する】 ● 落ち着いた青色なら、日々の送り迎えや買い物で付きがちな汚れも目立ちにくく、長く使える ● 家族での外出が楽しくなりそうだ ● 長く乗るなら、気に入ったものの方がいいかな
促進的記号 （発生の促進的記号）	「赤い車がいい！」と言う次男の目の輝き

図 8　パターン 2：当事者のイマジネーションと促進的記号を加えた TEM 図（BFP の前後を中心として）



くなりそうだ」という情緒的な予期，そして第二に，「長く乗るなら，気に入ったものの方がいいかな」という価値判断を含む予期である。

特に重要な点として，「赤い車がいい！」と言う次男の目の輝きが促進的記号（発生の促進的記号）として機能していたことが明らかになった。この記号は，当事者がそれまで持っていた実用性重視という価値観を揺るがし，新たな選択の可能性を開くきっかけとなっていたため，本論文では発生の促進的記号として分析した。そして，「赤い車がいい！」と言う次男の目の輝きという発生の促進的記号は，過去の経験に基づく実用的な判断と，家族の願いを考慮に入れた感情的な判断との間で揺れる当事者の意思決定プロセスにおいて，重要な意味を持つものとして作用していた。

これらの分析から，当事者の「赤色のファミリーカーを買う」（EFP）という選択が単なる実用的判断だけでなく，過去の経験の想起と未来への多様な予期，そして促進的記号との相互作用の中で形作られていったことが示された。特に，「赤い車がいい！」と言う次男の目の輝きという発生の促進的記号が契機となって，当事者の選択が実用性重視から家族の願いの尊重へと価値観が変容していく過程が明らかになった。

このように，パターン 2 の TEM 図では，イマジネーションの想起と予期を描写することで，BFP が発生した時点の促進的な力（SG）として働いた「「明るい色も良いかもね」という長男と妻の賛同」と「子どもが車選びに興味を持ってくれたことが嬉しい」と同時に，過去の経験や未来の予期としてどのような思考（振り返りや未来への期待）がなされていたのか。そして，促進的記号（発生の促進的記号）を可視化することで，「赤い車がいい！」と言う次男の目の輝きが，当事者にとって「これまでの車の色に対する価値観を揺るがし，未来の選択に大きな影響を及ぼした」重要な意味があるアイコン（対象の重要とされる性質を持つ記号）となっていたことを説明することができるようになった。

V TEM 図における時間的文脈の描き方 ―イマジネーション理論の援用による方法論的展開

本論文は，TEA の時間概念を方法論的に考察し，イマジネーション理論を援用した TEM 図の描写方法を検討してきた。ここでは本論文で設定した目的である以下の 2 点，(1) TEM は人々の経験を非可逆的時間の中でどのように記述しようとしているのか，(2) イマジネーション理論を援用することで，時間的文脈をどのように豊穣描写図像的に TEM 図を描くことができるのか，について整理する。

1 TEM は人々の経験を非可逆的時間の中でどのようにして記述しようとしているのか

まず，TEM 図における非可逆的時間はベルクソンの「純粋持続」の概念を基礎とし，TEM 図を作成する研究者は過去が現在に持続的に流れ込む状態を意識して人々の経験を TEM 図に描いていることにより意識的になる必要がある。これは，個人の経験を連続的かつ質的に変化するプロセスとして捉え，当事者の意識に必ずしも顕在化していない時間の流れをも含めて描きだすことを意味する。次に，ヴァルシナーの「促進的記号」の概念により，記号の影響で生じる行為は未来に属するという視点がより重要視されるようになった。これにより，TEM は非可逆的時間の中で現在という時点が過去からの影響を受けつつ，同時に未来への可能性を開くということに注視しているということがわかる。しかし，そのような後戻りできない時間ということが強調されるあまり，人がある時点で過去のことを振り返ったりすることをどのように記述すればよいのかという疑問が生まれてきた可能性が示唆された。そこで，本論文では，ズゥイットンの「イマジネーション」の概念を用いることで，時間的志向性という過去の経験や未来を予期することから新たな考えを創造するプロセスを描くことを試みた。イマジネーションによる時間的志向性は分岐点（BFP）において，人びとがどのように感じ，どのような抽象的なイメージをもっているのかということの理解を促し，分岐点において個人がどのような過去を振り返り，未来を予期しながら次の選択へと向かったのかを可視化することができる。このように，イマジネーションを援用することで，豊穣描写図像化した TEM 図の描写に関わる示唆を与える。このような理論的な統合は，TEM を用いた個人の経験における時間の重層的な意味を捉えることにつながると考える。

2 イマジネーション理論を援用することで，時間的文脈をどのように豊穣描写図像的に TEM 図を描くことができるのか

本論文では，豊穣描写図像的な TEM 図の作成の一つの可能性として，イマジネーション理論を援用した TEM 図の描き方を検討してきた。それは，イマジネーション理論を援用することにより，時間的文脈をより重層的に捉えるためである。

TEM で示される時間はベルクソンの純粋持続を基とした後戻りできない非可逆的時間である。そのため，事象の「いま，ここ」において想像する過去の出来事と未来の予期をどのようにして描くことができるのかという議論が行われてきた。純粋持続は，人為的に時間単位が設定される以前に存在するものであり，質的変化を意味するものである。そのため，その個人にとって意識されていなくとも時間が個人に意識的に持続的に流れ込み，その個人には特有の変化が常に起こっていることになる（香川 2009）。そして，純粋持続は本来ならば点では表せない境界

の曖昧なもの（香川 2009）であり，TEM 図はそのような時間の中にある人々の経験の事象を描いていることになる。先に述べたように，TEM 図では非可逆性を意味するために→（矢印）を描いており，時間を常に捨象していないということに自覚的であるために必要な概念である。

このような純粋持続を基にする非可逆的時間の中で人びとの人生径路を描こうとする TEM を用いて，どのようにして「いま，ここ」の時間を捉え，その経験について豊穣描写図像的に描くことができるのか，今後も更に検討を重ねる必要はある。しかし，繰り返しにはなるが，本論文においては，その一つの可能性としてイマジネーション理論を援用することを検討してきたのである。よって，本論文で主張したい論点をまとめると以下の 2 点に集約できる。まず一つ目は，イマジネーション理論における時間的志向性を援用することで，イマジネーションが持つ過去，現在，未来を自由に行き来することができるという特徴を加えることができる。そうすることによって，非可逆的時間が流れている中での個人が受けた場面と文脈をより重層的に理解する TEM 図を描くことができるのではないかという点である。二つ目に，分岐点（BFP）における選択場面の描写について，過去の経験の蓄積と未来への多様な選択の可能性がどのように結びついているのかを可視化することに役立つと考えられる。森岡（2015）が「複数の出来事をつなぐとき，場面と文脈の影響を大きく受ける。文脈が変化すれば，過去の出来事の意味づけもまた変わるという特徴をもつ（p. 6）」と指摘するように，イマジネーションによる想起と予期を描くことでその文脈に対する意味づけをより明確に可視化することを可能にし，豊穣化された TEM 図の描き方にもつながるのではないだろうか。

VI．おわりに—TEM 図における時間的文脈の描き方に対する課題

本論文では，TEA の時間概念を方法論的に考察し，イマジネーション理論を援用した TEM 図の描写方法について検討を行った。そして，「現在の個人の意味づけ」がどのような過去の想起と未来の予期で構成され，その分岐点で重要となった記号を示すことで個々人の人生径路をどのように豊穣描写図像化した TEM 図として説明することが出来得るのかという点について考えてきた。しかし，本論文で示すことができたのは一例に限られており，時間概念に対する理論的な整理とともに，TEM 研究としての実践方法については引き続き検討していく必要がある。よって，結びとし，以下の 3 つの方法論的課題を記しておきたい。

一つ目に，イマジネーションの時間的志向性を援用した「豊穣描写図像」的な描き方には，より多角的な事例を通じた検討が必要である。本論文では TEM のイマジネーション理論を参考としながらイマジネーションの予期と想起を描くことを試みた。しかし，このような描き方が唯一ではなく，純粋持続の概念に基づく非可逆的時間の流れの中で，イマジネーションによる過去の想起と未来への予期をいかに効果的に描写するかという方法論的な課題を今後も検討する必要がある。そして，イマジネーション理論の時間的志向性と非可逆的時間との関連性がどのような次元で結び合うものであるのか，時間概念に対する更なる理解と検討が必要であると考える。

二つ目に，TEM 図の複雑化とわかりやすさのバランスをいかに取るかという実践的な課題がある。TEM 図の中にイマジネーションや促進的記号の概念を導入することで図の表現力は高まるが，同時に図の複雑さも増大する。この両者の

バランスを適切に保ちながら，人生径路の本質的な部分を効果的に描きだす方法が求められる。

三つ目に，個人の経験と社会的文脈の相互作用をより精緻に表現する方法を深化させる必要がある。森岡（2015）が指摘するように，文脈の変化は過去の出来事の意味づけに影響を与える。この動的な相互作用を，TEM の理論的枠組みの中でどのように可視化するかという点は今後も課題として検討していく必要があるだろう。

本論文では TEM の時間概念に関する理論的基盤の整理と具体的な事例研究による描写方法の模索を並行して進めてきた。これらの課題に取り組むことは，人生径路をより豊かに理解することにつながり，TEM を用いたより豊穣的な人生径路の理解を可能にすることができるようになるのではないだろうか。

V　引用文献

Bergson, H. (1889) *Essai sur les donnees immediates de la conscience.* Paris: Felix Alcan. 中村文郎（訳）(2001) 時間と自由．岩波文庫.

檜垣立哉・藤田尚志（2022）第 1 章 時間と自由. 檜垣立哉・平井靖史・平賀裕貴・藤田尚志・米田翼（著）ベルクソン思想の現在．書肆侃侃房，30–78.

平井靖史（2022）世界は時間でできている—ベルクソン時間哲学入門．青土社.

市川章子（2020）想像を描く発生の三層モデル（TLMG）—外国人集住地域で日本語指導を受けた中国人青年の変容のプロセス．対人援助学研究，*11*，126–140.

香川秀太（2009）第 5 章 方法論に関する問いかけ 第 6 節 異種の時間が交差する発達—発達時間論の新展開へ向けて．サトウタツヤ（編）TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして．誠信書房，157–175.

上川多恵子（2023）第 2 章 TEA の基本概念一覧．上川多恵子・宮下太陽・伊東美智子・小澤伊久美（編）カタログ TEA—図で響きあう．新曜社，5–10.

上川多恵子・宮下太陽・安田裕子・サトウタツヤ（2023）イマジネーション理論と TLMG による促進的記号の検討—「コト」としての食をテーマとした事例をもとに．立命館人間科学研究，*45*，1–19. https://doi.org/10.34382/00018511

上川多恵子・宮下太陽・安田裕子・サトウタツヤ（2024）共食を通じた結婚初期夫婦の関係構築過程—TEM のイマジネーションモデルを用いた一考察．TEA と質的探究，*2* (2)，156–177. https://doi.org/10.60421/jatqi.2.2_156

木戸彩恵（2023）第 6 章 イマジネーション．木戸彩恵・サトウタツヤ（編）〔改訂版〕文化心理学—理論・各論・方法論．ちとせプレス，63–75.

宮下太陽・上川多恵子・サトウタツヤ（2022）TEM（複線径路等至性モデリング）のイマジネーションモデルに関する考察—記号圏とイマジネーション理論を踏まえて．立命館人間科学研究，*44*，49–63.

森岡正芳（2015）第 I 部 解説編 1 ナラティヴとは．森岡正芳（編）臨床ナラティブアプローチ．ミネルヴァ書房，3–34.

中村昇（2014）ベルクソン＝時間と空間の哲学．講談社.

サトウタツヤ（2009a）第 1 章 TEM の発祥と T・E・M の意味 第 1 節 TEM 発祥の時間的経緯．サトウタツヤ（編）TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして．誠信書房，1–16.

サトウタツヤ（2009b）第 4 章 概念の豊富化と等至点からの前向型研究 第 1 節 ZOF（目的の領域）による未来展望・記号の発生と「発生の三層モデル」．サトウタツヤ（編）TEM で

はじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして．誠信書房，92–101.
サトウタツヤ（2013）総括．共同対人援助モデル研究 報告書 6「変容する語りを記述するための質的研究法—TEM and Narrative as Archives」.
サトウタツヤ（2015a）複線径路等至性アプローチ（TEA）．安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）TEA 理論編—複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ．新曜社，4–8.
サトウタツヤ（2015b）複線径路等至性アプローチ（TEA）．安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）TEA 実践編—複線径路等至性アプローチを活用する．新曜社，4–8.
サトウタツヤ（2019）第 3 章 記号という考え方—記号と文化心理学 その 1．木戸彩恵・サトウタツヤ（編）文化心理学—理論・各論・方法論．ちとせプレス，27–39.
サトウタツヤ（2022）4 章 TLMG（発生の三層モデル）—価値と行為を媒介する記号の働きに注目する．安田裕子・サトウタツヤ（編）TEA による対人援助プロセスと分岐の記述—保育，看護，臨床・障害分野の実践的研究．誠信書房，28–42.
サトウタツヤ（2023）第 3 章 記号という考え方—記号と文化心理学 その 1．木戸彩恵・サトウタツヤ（編）〔改訂版〕文化心理学—理論・各論・方法論．ちとせプレス，27–39.
やまだようこ（2010）時間の流れは不可逆か？—ビジュアルナラティヴ「人生のイメージ地図」にみる，前身する，循環する，居るイメージ．質的心理学研究，*9*，43–65.
安田裕子（2015）径路の可視化—TEA による分析の流れ（その 2）．安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）TEA 実践編—複線径路等至性アプローチを活用する．新曜社，47–51.
Valsiner, J. (2007) *Culture in Minds and Societies: Foundations of Cultural Psychology.* サトウタツヤ（監訳）（2013）新しい文化心理学の構築—〈心と社会〉の中の文化．新曜社.
ヤーン ヴァルシナー（福田茉莉・大野カヤ（訳））（2009）第 6 章 TEM がもたらす未来 第 1 節 未来に向かう—過去を形成する 永続する不確定性とともに生きる．サトウタツヤ（編）TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして．誠信書房，176–185.
Valsiner, J. (2014) *An Invitation to Cultural Psychology.* サトウタツヤ・滑田明暢・土元哲平・宮下太陽（監訳）（2024）文化心理学への招待—記号論的アプローチ．誠信書房.
Valsiner, J. (2018) Facing the future: Making the past. Giuseppina, M. (ed.) *Beyond the Mind: Cultural Dynamics of the Psyche.* Information Age Publishing, Incorporated, 55–63.
Zittoun, T.（2020）2019 年度 日本発達心理学会国際研究交流委員会公開講演会 講演記録 ライフコースにおけるイマジネーション：社会文化的心理学の視点から（Imagination in the lifecourse: A sociocultural psychology perspective）．発達研究，*34*，204–228.
Zittoun, T. & Gillespie, A. (2015) The loop of imagination. Zittoun, T. & Gillespie, A. (eds.) *Imagination in Human and Cultural Development.* London: Routledge, 38–55.
Zittoun, T. & Valsiner, J. (2016) Imagining the past and remembering the future: How the unreal defines the real. Sato, T., Mori, N. & Valsiner, J. (eds.) *Making of the Future: The Trajectory Equifinality Approach in Cultural Psychology.* Charlotte, NC: Information Age Publishing, 3–19.

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik
https://ratik.org